

はじめに

与謝蕪村は、私がいちばん好きな俳人である。その理由は、中学校の国語の教科書に載っていた次の句に感動したからである。

春の海終日のたりのたりかな

私は本州最南端の町、串本町潮岬の生まれで海をみて育ってきたが、春の海の情景をこれほど見事に詠んだ作家は他にいない。

海は天候によって表情を変えるが、春の海に見る人の心を胎蕩とさせる情景を五七五の十七文字で表現するのは並大抵ではない。それをいとも簡単に表現している技量に驚嘆した。

これは蕪村47歳の作であるが、円熟した力量を感じさせる。

次に高校時代に出会った句に、

憂いつつ丘にのぼれば花菱

というのがあった。これも教科書に載っていたのであるが、高校時代にしんねりむつつりした心境の日々を送っていた私にとって、自分とおんなじやと思ったのである。

学業や家族、友人関係などへこむことが多かった自分は、丘に登って空を眺めることと読書しか方策がなかった。鬱々としながら、憂いつつ丘にのぼればと口ずさみながらぼんやり流れゆく雲を見ていた。

金もガールフレンドもない侘びしい高校生活であったが、読書だけは数少ない喜びであり、蕪村の句で慰められた。

和歌山大学に進学した私は寮生活を始めたが、福井県出身のM君が文学趣味の持ち主で蕪村天才説をぶっていた。かれは、蕪村は近代詩の先駆者であり、日本の近代詩は蕪村を源流とするという論をたてていた。

私にはさっぱり分らず、とりあえず『蕪村全集』を借りて読んだ。そのなかで『春風馬堤曲』に惹かれた。なんという教養と表現力だろうか、若い娘と老人との交流が、淀川の風景をバックにして巧みに描かれていた。

蕪村に傾倒した私は、ことあるごとに蕪村を賛美して周囲を閉口させ「かぶら」というかんばしくないあだ名を献上された。私に蕪村を紹介したM君は、その後作詞に熱中し、部屋に籠もるようになった。神経衰弱気味の彼を心配したわたしたちは、彼の父上に連絡して郷里に連れ帰っていただいた。

その後、復学し教職についたとのことである。

私が大学3年のとき、大学紛争が勃発した。全共闘の大学封鎖に反対した私たちは、授業再会を唱えて「革命の敵」として糾弾された。

大学は革命の砦ではなく、学問文化を学び継承する場であるという、まっとうな主張が「反革命」とされたのである。角材を握って迫る彼らに「暴力反対」と叫んで、殴られないように逃げ惑うという情けない状態であった。

授業再開を迫る私たちに対して、当時の大学当局はこれを見做し「革命理論」を振り回した全共闘を支持する始末である。大学教授のお粗末さに失望した。

教育学部は授業を続けたが、経済学部は封鎖を続行した。まともな教養を持たずに卒業したわれら団塊世代は、社会人となって企業戦士となり、高度成長の尖兵となった。

管理職になるとバブルを演出し、金融危機へと経済を陥れ、退職後は両親の介護に追われている。溜息が出る思いだが、これが私たちの世代の役割なのであろう。

わたしは1970年から教職に導き、僻地の中学校で国語教師となった。山村の子らと鮎釣りや蕨とりに興じながら、教職生活を楽しんでいた。

夏河を越すうれしさよ手に草履

と、いった光景であった。よく川で鮎を釣った。休日には生徒たちと遊び、下宿で飯を食った。教師としては、満足、充実した暮らしであった。

地域住民の間には文学活動が盛んで、俳句や短歌の結社があり、私も仲間に入れていただいてへぼ句やへぼ短歌を詠んだ。とくに、宮口さんと気が合い、近藤 芳美氏に心酔していた彼から短歌を教えていただいた。

2008年3月31日大島中学校を退職した私は、1993年から始めていた熊野古道の独歩行と熊野の地域社会の民族の調査のまとめにとりかかった。

熊野の地域社会の民族調査の中で、多くのひとびとにお話を伺った。そのときの感慨を俳句や短歌にしたためて備忘録に日記替わりに書き始めた。

また、学級通信に詩歌の紹介のコラムを載せた。しかし、しんねりむつつりした句風や自由律になじめなかった私は、地域の結社に属せずに、新聞投稿を続けていた。

2008年12月、たまたま手にした朝日新聞文化欄に八木 健会長の滑稽俳句協会の紹介記事を読んで、同感だと思っただ。自分が考えていた俳句論と同じであり、さっそく会員に応募した。

人生には転機があり、それぞれ貴重な出会いがあるが、蕪村、M君、宮口さん、八木会長がわたしの詩歌人生の師匠である。余生を滑稽俳句の普及に尽力したいと希望している。

蕪村句の発想の滑稽さ

【困 惑】

尼寺や十夜にとどくさねかづら

元文2年（1737年）の蕪村22歳の時の句である。
宰島と名乗っていた頃の句である。

尼寺は鎌倉の東慶寺を意味し、縁切寺として有名であった。夫との離縁を願って、東慶寺に出家した女性の元に、そろそろ還俗だネと髪の手入れ用のさねかづらが友人から届いた。

しかし、その日は宗門の男女が群集して、念仏法要を催す十夜の日であった。
尼さんにさねかづらは不要だが、それが届けられた日が念仏法要の日であることに意外性がある。届けられたさねか

づらを前に困惑している比丘尼の姿が目浮かぶ。

思わず、苦笑いをしてしまう。

【羞恥心】

去られたる身を踏込んで田植哉

これは宝暦8年（1760年）の45歳の時の作品である。
田植えは農村の共同作業である。
結いの労働力は独身女性を中心であった。狭い地域のこと
であるから、離縁された婚家の田植をも、手伝うのである。

羞恥心、悲しみ、未練、恨みなどが入り混じった複雑な
感情を断ち切って婚家の田植えに向かう女性の決意に共感
する。

しかし、それはどこか滑稽でもある。
踏み込んでと決意した女性の姿は迫力を伴い、思わず頑張
れと声をかけたくなる。今も昔も女は強いなあ。

【凝 視】

伐りたをす木はそのままの落葉哉

伐り倒した木は、そのままの姿で地上に倒れており、そ
の輪郭のまま落葉が散り敷いている。
情景を凝視してこそ初めて描ける作品である。

木の形を動物、ひと、物と広げていくと自然のつくる美術
作品にはるのではないか。
しかし、それはA級作品ではなく、B級作品であることに
ユーモアを感じる。

現代では、降り注ぐのが落葉でなくて放射能や花粉や黄
砂になり、ブラックユーモアになってしまうのが残念であ
る。科学の進歩も自然と調和して初めて価値を持つのでは
ないか。

【合 点】

水桶にうなづきあふや瓜茄

瓜や茄は形がおもしろい。
下膨れや楕円でみているだけでユーモラスであるが、凜とした爽やかさをもたない。

いつもブツブツと不平をいっているようなつまらん存在だ。しかし、そのしんねりむつつりさんたちが、話が合ったのだろう。顔きあっている。
居酒屋で城址の悪口をいいながら、溜飲を下げているサラリーマン諸侯に重なり合っておもしろい。

上句は元文2年の作で、蕪村は22歳であった。

【変身・変心】

秋のくれ仏に代る狸かな

これも上句と同時期の作品で、若き蕪村の作であるが、民話では狸はいたずら者でさんざん人を化かしている。

私の住んでいる潮岬では、磯釣りにいった釣り人が、大漁で舞いあがり、家に帰って魚籠をみると木の葉だったという話が残っている。
釣り人に聞くと、実際釣った魚を狸が忍び寄ってこっそり盗むらしい。
しらんまに無くなっているという。
しかし、狸と人とが共存共栄を図っていくのが望ましい。
獲物を分け合えば、狸はあたんしない。

かくて、人を化かし続けた狸も、年貢の納め時がきたようだ。死んで仏に化けたのである。

おもしろうてやがて哀しき狸殿であるが、昨今の不況では復活して1万円札に化けて欲しいと、願っている人も多いと思うが・・・

【軽 侮】

老武者と大根あなどる若菜かな